

事務局：〒141-0031 東京都品川区西五反田1-13-7 マルキビル

電話 / FAX : 03-5740-9505 e-mail : 最後のページ参照

日本教育工学会ホームページ <http://www.jset.gr.jp/>

ISSN 1340-9913

## 日本教育工学会第24回全国大会の御礼

実行委員会委員長 南部昌敏（上越教育大学）

日本教育工学会第24回全国大会が平成20年10月11日から13日の日程で、文部科学省、上越教育大学、新潟県・長野県・富山県・上越市の各教育委員会のご後援を得て、上越教育大学（新潟県上越市）を会場に開催され、県外から725名、県内から122名、外国から9名の計856名の参加者で盛会裏に終了することができました。ひとえに、会員の皆様はじめ多くの関係者の方々のご支援とご協力のおかげと心から深謝申し上げます。中でも、会長の赤堀侃司先生はじめ理事の皆様、大会企画委員会委員長の木原俊行先生、副委員長の東原義訓先生、室田真男先生はじめ、大会企画委員会の委員の皆様には、プログラムの全体企画と具体的プログラムの策定とその運営に多大なご尽力をいただきました。実行委員会を代表いたしまして、心から厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。今大会では、シンポジウム1Aでは「ソーシャルネットワークの広がり」と題して、ソーシャルネットワークに関して、これまでの流れやこれからの方向性、実践のあり方等、様々な観点から、教育への利用の可能性について議論していただきました。シンポジウム1Bでは「実践研究をどのようにデザインし、論文にまとめるか」と題して、実践研究において「理論」が果たすべき役割、実践者と研究者の共同のあり方、論文に求められる論理展開や内容、スタイル等について討論していただきました。シンポジウム2では、米国より招聘したDavid G. Imig教授（MARYLAND大学）の基調講演を盛り込み、「教師教育の再考～専門職としての教師の資質能力の規準とその育成方法～」と題して、我が国の教師教育の過去・現在・未来について協議を深めていただきました。さらに、課題研究は6つのテーマで計32件の研究発表を基にした熱心な討論、一般研究は各テーマ毎の分科会形式とポスターセッション形式での発表と交流と、どの会場も活発な意見交換が展開されました。それぞれのコーディネータ、司会、座長の皆様のご支援とご協力に心から厚く御礼申し上げます。

また、昨年に引き続き、韓国教育工学会の副会長でSEJONG大学のInsook Lee教授を招待することができ、これからの日韓の研究交流にとって意義深い大会となりました。日本教育工学会の益々の繁栄を祈念し、御礼の挨拶と致します。なお、本大会は新潟県のコンベンション対象事業に指定されて運営されましたことを申し添えます。

### 本号目次

第24回全国大会の御礼	1	ショートレター増刊号論文募集のご案内（第一報）	12
第24回全国大会の報告	2	大学教員のためのFD研修会のご案内	12
研究会案内／発表募集	7	研究奨励賞の推薦依頼	13
冬の合宿研究会のご案内（最終報）	10	理事会議事録	14
産学協同セミナーのご案内（第一報）	10	新入会員等	16
論文誌特集号のご案内（最終報）	11		

# 日本教育工学会第24回全国大会の報告

大会企画委員会委員長 木原俊行（大阪教育大学）

第24回大会は、10月11日(土)～13日(月)の3日間、上越教育大学を会場にして開催されました。参加者数は856人、発表件数は427件という、大規模な大会となりました。大会会場は、落ち着いたたたずまいのキャンパスに位置し、発表等に適したスペースが準備されていました。加えて、開催校のスタッフの方々がきめ細かな配慮で参加者を迎えてくださり、気持ちよく発表や討論をおこなうことができました。スタッフの方々に、厚く御礼申し上げます。

本大会でも、例年と同様、シンポジウム、課題研究発表、一般研究発表、そして企業展示等が企画・運営されました。大会第1日目は、一般研究発表1(9会場)で始まり、午後には2つの並行シンポジウムと一般研究発表2(11会場、International Sessionを含む)が催されました。各会場とも盛況で、活発な議論が繰り広げられました。前回大会から導入された事前登録システムもいっそう徹底され、大会の円滑な運営に大きく役立ちました。これは、五反田事務局のスタッフと清水康敬理事のお力によるものです。記してここに感謝の意を表したいと思います。

大会2日目には、午前中に一般研究3のセッション(13会場)が催されました。その中には、ポスターセッションが含まれますが、会場校の上越教育大学のご配慮により、今回はポスター発表用に広い部屋を確保していただいたので、ポスター発表会場が一箇所に絞られ、ポスター前での意見交換が極めて充実したように思われます。

同日の午後は、全体会とシンポジウム、懇親会というプログラムでした。全体会では、上越教育大学長のご挨拶を、テレビ会議システムを介して賜りました。また、韓国教育工学会の学会長等の来賓をご紹介しました。続いて研究奨励賞と論文賞の発表・表彰が行われましたが、論文賞の受賞者によるプレゼンテーションを初めて導入しました。シンポジウムでは、米国からデービット・イミグ博士を招聘し、彼の地の教師教育の動向等をレポートしていただきました。また、教員免許状更新制、教職大学院などの新たな制度の中での教員の養成・研修等について、情報・意見を十分に交換することができました。懇親会は、高田駅近くのホテルで開催されましたが、会長や実行委員会長の挨拶に続き、ご来賓の方々からも、お言葉を頂戴しました。また、次期開催校たる東京大学の山内先生に、次回大会の特徴等を示していただきました。

大会3日目には、午前中に一般研究発表4のセッション(11会場)が、また午後には課題研究発表のセッション(6会場)が設定されました。大会の最後を締めくくる課題研究セッションにも、数多くの会員が参加して、熱心な議論を繰り広げてくれました。

11・12日に催された企業展示についても、参加者が足を運びやすいスペースを会場校にご用意いただき、会員が企業の製品等にふれることのできる、よき舞台となりました。

以上のように、3日間を通じて、成功裏に大会の幕を閉じることができました。参加いただいた会員の皆様とそれぞれの立場で大会の企画・運営にご協力いただいた方々に、厚く御礼を申し上げます。以下に、シンポジウムと課題研究のセッションの詳細を報告します(登壇者の敬称等は略します)。

## シンポジウム1A：ソーシャルネットワーキングの広がりとお利用

コーディネータ：金西計英(徳島大学)、室田真男(東京工業大学)、森田裕介(早稲田大学)

司会者：金西計英(徳島大学)、森田裕介(早稲田大学)

報告者：安武公一(広島大学大学院)、風間一洋(日本電信電話株式会社 未来ねっと研究所)

庄司昌彦(国際大学グローバル・コミュニケーション・センター)、

虎岩雅明(NPO法人TRYWARP)

指定討論者：加藤浩(メディア教育開発センター)

現在、インターネット上では、様々なソーシャルネットワーキングサービス(SNS)が生み出され、急速に広がっている。教育現場でもこうした動きに対し、多くの研究者や教員が注目し、具体的な活用方向の模索が進められている。そのため、本シンポジウムでは、ソーシャルなサービスの現状や方向性について議論する場を企画した。当日は、多くの参加者を得て、本テーマへの関心の高さを再認識することができた。

まず、庄司から、社会学的な観点に基づくSNSの定義、さらに、国内の様々なSNSを使った教育的な取り組みについての報告がおこなわれた。次に、風間からは、コミュニティの情報の取り扱いの技術的な手法、クラスタリングの方法、可視化の方法について、具体的な事例を示しながらの報告がおこなわれた。さらに、虎岩からは、氏が取り組んできた大学生らを中心にしたSNS「あみっぴい」について、その実践から得られた知見についての報告があった。最後に、安武からは、高等教育でのSNS活用について

て、氏のゼミ等での実践に基づいた報告がおこなわれた。

続いて、指定討論者の加藤から、技術的な動向について、SNSの教育的な方向性についての質問がおこなわれた。コミュニティに内在する危険性等についての指摘等もあり、SNSの多面性について理解が得られた。全体的な議論の時間は必ずしも十分とは言えなかったが、本シンポジウムを通して、SNSの教育への可能性の一端が明らかになったと言える。

### シンポジウム1B：実践研究をどのようにデザインし、論文にまとめるか

コーディネータ・司会者：木原俊行（大阪教育大学）、清水康敬（メディア教育開発センター）  
報 告 者：稲垣忠（東北学院大学）、植野真臣（電気通信大学）  
コメンテーター：山内祐平（東京大学）

本シンポジウムは、実践研究の方法論とそれによる知見の論文化に関するものである。第23回大会に続き、大会企画委員会と編集委員会が連携して企画・運営した。今回も多く参加者を得られ、このテーマが、現在、本学会が取り組むべき、重要な問題であることが再確認された。

2時間のシンポジウムでは、まず2名の報告者が、自らが着手した実践研究を題材にして、その方法論等をレポートした。まず、稲垣は、「研究者が実践の現場をフィールドとして研究に携わる場合」の事例として、学校間交流学習の授業設計モデルの開発について、その概要、その後の応用研究の展開等を報告した。また、植野は、自身が大学の講義で運用しているe-Learningについて、そのモデル、それを体現するシステムの開発、とりわけLMSの特長について報告するとともに、その実践の模様を語った。

続いて、コメンテーターの山内が、稲垣・植野の報告等を批評した。それは、実践研究の了解性、それをもたらす経験や事例の蓄積等に代表される。

実践的有効性に関する確認等を求めるフロアからの問い、それらに対する報告者やコメンテーターのリアクション等を経て、最後に、司会者が、実践研究の方法論のポイントを、1) 教育実践で培った経験的な知識や暗黙知の活用、2) それらと理論とのすり合わせ（理論と実践の往還）、3) 多様な事例（材料）の収集、4) 問題解決的アプローチの採用、5) 精緻化（普及）のためのプロセスや仕掛けの設定、にまとめた。また、知見の論文化における留意点を、1) 経験知が結論として叙述されるように論文を構成する、2) 依拠する理論と社会的動向への言及、3) 複眼的叙述、4) モデル的表現の駆使、5) 改善点、効果、成果のアピール、6) 応用や普及等に向けた示唆、に整理した。

### シンポジウム2：教師教育の再考～専門職としての教師の資質能力の規準とその育成方法～

コーディネータ：南部昌敏（上越教育大学）、東原義訓（信州大学）  
司 会 者：南部昌敏（上越教育大学）  
基 調 講 演 者：デービット・イミグ（メリーランド大学）  
報 告 者：吉崎静夫（日本女子大学）、福島裕敏（弘前大学）、藤田武志（上越教育大学）、東原義訓（信州大学）  
指 定 討 論 者：小柳和喜雄（奈良教育大学）

基調講演として、デービット・イミグは、専門職としての教師教育の特色、教師教育の国際的傾向と課題を紹介し、次に、米国における教師教育の傾向として、証拠に基づく教師教育プログラムの創成、教師教育のパラダイムの変遷、教師の特質への着目、臨床的教師教育プログラムの構築、原則に基づき開発された教師としての資質能力基準への着目等について紹介した。そして、教員養成プログラムを開発するために、学生の学習に着目した新しいカリキュラムの構築、資質能力を評価する方法の発見、証拠と内省の強調、実践の共同体と学習者ネットワークの構築等について検討することが必要であると結論づけた。シンポジウムでは、吉崎は、教師の成長を促す方策と授業力量の構成要素とその側面の整理枠に基づき、これからの教師教育の方向性を提案した。福島は、教職課程の履修を通じて習得する教師として最小限必要な資質能力を明示的に確認するための「教職実践演習」の実践から、そのカリキュラムと教育実習の事後指導の充実、実施体制の整備の必要性等を提案した。藤田は、臨床力と協働力で構成されている「即応力」の修得を目指して、体験→省察→発信の学びのサイクルで展開する上越教育大学教職大学院のカリキュラムと専門職としての教師の資質能力とその育成方法と課題について提案した。東原は、米国における免許リニューアル制度との比較検討に基づき、教師自身が自らの職能開発のために機能する手立てを考慮した、信州大学における教員免許更新講習の試みについて提案した。引き続き、小柳より、改革の方向性、アウトカムの評価方法、学部から大学院への連続性に関する質問が、フロアから「スタンダードの設定はそれが創意工夫を縛ってしまうのではないか」という質問が出され、各登壇者より意見が述べられた。最後に、会長より、日本教育工学会において、継続して教師教育の課題について議論していきたいとの提案がなされた。

### 課題研究1：つながりメディアの教育利用—モバイル、ユビキタス、ロボットアバタ、SNS等—

コーディネータ：緒方広明（徳島大学）、中原 淳（東京大学）、高井尚一郎（内田洋行）

司 会 者：緒方広明（徳島大学）、中原 淳（東京大学）

本課題研究は、場所や空間を超えて、人々を結ぶ様々な「つながりメディア」の教育利用について講演募集を行った。例えば、モバイル端末を用いて親子や友達をつなぐ、コミュニケーションロボットを用いて教室同士をつなぐといった、新しい「つながりメディア」を用いた教育支援の試みや、センサネットワーク・RFIDタグなどを用いて学習者同士をつなぐユビキタス学習環境、さらにWeb2.0の技術やSNSなどのSocial Computing技術e-Learningに取り入れた「e-Learning2.0」などを対象とした。

その結果、以下の6件の発表が行われた。殷（九州大学）らは、外国語学習において、適切な学習相手をみつけるためにSNSを用いて知識アウェアネスを提供するシステムを提案した。また、三角（徳島大学）らは、RFIDタグを用いて実世界オブジェクト（モノ）と映像をリンクすることにより体験を共有するシステムと経験映像の比較方法を提案した。佐藤（東京大学）は、幼児のNarrative Skill習得において、親の語りの引出しの向上を支援するシステムの開発について発表した。久松（東京大学）は、携帯電話で利用可能なSNSシステムを用いた読書支援の設計と開発について発表した。佐藤（日本福祉大学）らは、全学で利用されているSNSとそのViewerを活用した体験学習の実践について述べた。北村（東京大学）は、日本教育工学会に掲載された論文を対象にして、年ごとによく使われるキーワードを分析した。セッションの最後には、それぞれの研究では、質(Quality)と量(Quantity)がキーワードであり、読書や親の語り出しなどの量が少なければ、それぞれの量を高める支援が必要となり、一方で、映像や体験学習、論文などの量が増えれば、分析を行い、質を高めるための支援が必要になってくるとのコメントがあった。今後は、トピックをもっと絞り、お互いに深く議論できる場を提供できればと思われる。

### 課題研究2：教育工学分野における新しい技術を活用したシステム開発の展開

コーディネータ・司会者：金西計英（徳島大学）、林敏浩（香川大学）、室田真男（東京工業大学）

本課題研究は、学習履歴のマイニング、メタオブジェクトを用いた学習履歴の共有、生体情報や感性情報を用いた学習履歴の分析など、学習状態を適切に診断するための新しい技術を活用した教育システム開発などに関して講演募集を行い、5件の研究発表でセッションを構成した。松河（大阪大学）らは、中学校1年から高校1年生までの数学の模擬試験の誤答データと高校1年生の英語の模擬試験の回答データを対象として、相関ルールを利用して分析を行い、その結果について報告した。櫻井（NECラーニング株式会社）らは、プレゼンテーションとメモ作成を支援する電子会議支援システム（ConforMeeting/e）を講義環境に適用し、そこで得られたデジタル学習行動ログの分析方法および得られた結果について報告した。ソムマン（電気通信大学）らは、eテストのための得点・時間予測システムの開発を進めており、特に複数の予測得点分布モデルおよび所用時間分布モデルを複数検討して、このシステムに適しているモデルについて報告した。駒木（ATR Learning Technology株式会社）らは、ATRにおいてこれまでに蓄積されてきた外国語学習に関する基礎実験に基づき製品化されたATL CALLについて報告した。特に、システムデモにより、発音のスコア化、発音による単語選択、アクセント位置の測定などの機能の説明がされた。村川（鳴門教育大学）らは、特色GPにより開発した「知の総合化ノート」を、教職大学院生に活用させ、ネットワーク上で個々の学生が館長となりバーチャルな博物館を構築する取り組み「実践・知のスマソニアン」について報告した。最後に、本セッションで発表された5件の研究を中心に冒頭で述べた新しい技術を活用した教育システム開発に関して40分程度の全体討議をした。統一的な討議というより個々の研究で開発されたシステムについての質疑応答が中心になった。このような点からはもう少しテーマ設定を工夫した方がよかったと考える。

### 課題研究3：ICTを活用した教育システムをどのように評価するのか

コーディネータ：久保田賢一（関西大学）、向後千春（早稲田大学）、栗山健（学習研究社）、

平嶋 宗（広島大学）

司 会 者：平嶋 宗（広島大学）

ICTの教育への活用をより実り豊かなものとするためには、様々な立場の研究者がお互いの立場を尊重しつつ、異なる視点からの評価・意見をいかにして取り入れ、また、お互いの成果をいかにして融合していくのかが大きな課題といえる。このような問題意識を踏まえて、本課題研究では最初に6件の発表が行われ、それを受けた形で発表者を中心にフロアも交えて様々な観点から活発な議論が行われた。柏原（電気通信大学）は、学習過程のモデル化とそのモデルに基づく支援システムの設計という技術的

なアプローチでは、モデルおよび設計の関係性の明示化が重要であるとの視点を提示した。向後（早稲田大学）は、教育システムの価値を考える上で、その研究において根源的に目指していることと、現時点での達成目標とを明確に切り分けることの必要性と難しさを強調した。久保田（関西大学）は、学際的なシステム開発の経験に基づき、立場の異なる関係者がそれぞれの役割を主体的に発展させていくことで新しい可能性が生まれてくることを指摘した。宮田（滋賀大学）は、研究開発者、学習者、教員の評価観点のズレを事例に基づいて指摘した上で、それらを修正していくための専門家の育成が必要であるとの指摘を行った。冬木（関西大学）は、e-learningシステムの導入および運用における問題点の考察を通して、様々な観点からの評価がかかわってくることを報告し、それらを考慮した開発・運用の必要性を指摘した。湯澤（静岡大学）は、モデルとなる授業パッケージを提供し、それに対するFD活動を教員に行わせることでICT活用を活性化しようという試みについて報告を行った。総合討論は、向後の指摘を中心に、教育システムが根源的に目指すものとは、現実に達成可能な範囲とは、さらには、それらの達成可能な事柄を本来の目的と一致させることができるのか、などについて、活発な議論が行われた。また、教育工学における様々な研究が、モザイク的なもので終わるのか、あるいはつぼ的に融合していくものなのかについても議論が行われた。問題の大きさゆえに明確な結論というものは出なかったが、問題意識を持つこと、および議論を積み重ねることの重要性については、一致を見たといえる。

#### 課題研究4：初等中等教育におけるICT活用のデザイン・実践・評価

コーディネータ・司会者：高橋 純（富山大学）、森田裕介（早稲田大学）

「教育の情報化」に関する政策が進められ、ICTを活用したわかる授業の実現や学力向上が求められてきている。そこで、本セッションは、テーマを本年の論文誌特集号とも連携させつつ、初等中等教育での学習指導におけるICT活用のデザインと実践、その評価等に関する5件の研究発表で構成した。赤堀（東京工業大学）らは、ニンテンドーDSに教育ソフトを組み込み、これを児童生徒が普通教室における教科学習、放課後や家庭での学習等に活用した結果、モバイル学習ならではの効果、特に子どもが集中し継続して学習する効果がみられたと報告した。堀田（メディア教育開発センター）らは、一斉授業の授業過程における教員のICT活用の目的・頻度・タイミングについて調査した結果、共通性よりも、多様性が認められたと報告した。中澤（大阪大学大学院）らは、タイと日本の小学校間で食育をテーマにした「超鏡」による遠隔学習を行った結果、手巻寿司を画面上で互いに並んで食べるといった相互にやりとりができる環境が交流促進に効果があることや、安定した回線といった技術的な基盤が重要であること等を報告した。田島（お茶の水女子大学）らは、教員のICT活用指導力の育成を目標としたe-learning研修システムを構築し、全国6地域の7,682名の教員を対象に研修を行った結果、ICT活用の知識と意欲の両面を伸ばせたこと、受講者の教員経験年数や事前のICT活用指導力の高さによって効果が異なること等を報告した。佐藤（名古屋大学）らは、全国10校の小中学校に大型提示装置を含む3パターンのICT機器構成を導入した結果、説明・発表する、見せる・伝える場面での活用が多いことから、これらを実現しやすいICT機器の構成が重要であると報告した。5件の発表は、いずれもわかる授業の実現等をベースとしつつも、教科指導におけるICT活用、家庭学習や先進的技術の活用など幅広い内容の実践報告、それらの実践を支える教員研修やICT環境に関する研究発表であった。互いに関連する部分も多く、さらに論文誌特集号に関する話題提供も行われ、活発な討議が続いた。

#### 課題研究5：情報教育研究・実践の方向性－教育課程の改訂を受けて－

コーディネータ：小泉力一（尚美学園大学）、中橋 雄（武蔵大学）、野澤敏夫（東京書籍）

司 会 者：小泉力一（尚美学園大学）、中橋 雄（武蔵大学）

本課題研究では、教育課程改訂に伴い、さらなる充実が求められている情報教育研究・実践に関する4件の発表があった。三田（岩手県立総合教育センター）は、生徒が無線LAN対応型携帯電話で、教室内のみで閲覧可能なプロフィールサイトを制作し、表現・発信の方法について学ぶとともに個人情報保護の問題を考えるという情報モラルの教育実践について報告した。実践後にアンケート調査を行ったところ、携帯電話を使うことの危険性を意識する生徒の記述がみられた。尾崎（札幌市立平岡中学校）らは、同校における2年間にわたる情報モラル教育の取り組みと調査データをもとに、情報モラル教育を普及・定着させるための方法について報告した。取り組みの実践から、特に、教員全員が主担当として課題解決学習に取り組むことが、指導に自信を持たせるために重要であることが明らかにされた。山本（熊本県立教育センター）らは、情報モラル指導における家庭と小学校の連携プログラムの開発と評価について報告した。保護者を対象にした調査における因子分析・共分散構造分析の結果をもとに、家庭と学校の連携を深めるための促進要因を抽出し、それらの関連を明らかにした。そして、実際に連携プログ

ラムを運用・評価した結果が示された。本郷（大妻女子大学）らは、「情動的なもの見方・考え方」を「情報を軸として社会現象や自然現象などさまざまな事象を捉えようとする理論的な枠組み」として捉える考え方について、教材例となるソフトウェアを用いて紹介した。これに基づく授業実践を必修教科「情報B」で行った結果、生徒・教師へのアンケートから好意的な反応を得たことを報告した。全体討論では、『『情動的なもの見方・考え方』と現行の教育課程の関係」「情報関連科目、教科教育、家庭教育など、多様な対応が検討されるべき情報モラル教育の位置づけ」「情報発信者となる教育を行う以前に情報モラル教育を実施することの重要性」「未成年者が情報発信することに責任を持たせる制度の必要性」などについて、活発な議論が行われた。そして、今後も学会として、系統的な情報教育の在り方に関する検討を重ねていく必要性が確認された。

#### 課題研究6：新しい時代に対応する学力、それを育む授業・カリキュラム

コーディネータ：新地辰朗（宮崎大学）、田口真奈（京都大学）、野中陽一（横浜国立大学）  
司 会 者：新地辰朗（宮崎大学）、野中陽一（横浜国立大学）

本課題研究では、新しい時代に対応する学力を育むための授業やカリキュラム等、様々な方法によって教育活動を質的に向上させようとする取り組みについて、6件の発表が行われた。

最初の3件は、新潟県、富山県、長野県の学校に依頼した招聘発表であった。野田（上越市立大手町小学校）からは、人間力の育成をテーマに、それらを支える5つの資質・能力の育成に対応した教育課程の開発過程と、その成果たる7つの授業改善の視点についての報告があった。広田（富山市立堀川小学校）からは、教師の授業の枠組みを変容させる解釈研究について具体的な事例に基づいて報告があった。橋澤（長野市立三輪小学校）からは、35回に及ぶ公開授業研究において、どのような学力に視点を当ててきたのかを整理した上で、本年度の取り組みとしてICT活用による授業設計の在り方の再検討が報告された。

後半の3件は、公募によるものであり、岡部（金沢星稜大学）らは、PISA型読解力を育成するためのメディア活用の授業設計プロセスモデルを示し、実践事例への適応について紹介した。中山（東京工業大学）らは、テレビ番組とICTの連動によって探求型言語力の育成をめざした授業デザインと探求型言語力の評価ツールの活用について報告した。遠藤（東京工業大学附属科学技術高等学校）らは、技術者モラル教育や世界史の授業実践を通して、「主要能力」の育成に有効な指導方法について提案した。

各発表における学力の捉え方が多様であったため、フロアからの発言により知識・技能を活用する力に焦点を当て、能力育成のための方法やカリキュラムについてそれぞれの立場から意見交換を行った。

## 大会論文集の購入について(お知らせ)

第24回全国大会の大会論文集に残部があります。ご入用の方は、下記のいずれかの方法で7,000円（送料1,000円を含む）をご送金下さい。入金が確認され次第、お送りいたします。

(1) 郵便局備え付けの郵便振替用紙に記入してご送金下さい。

その際、送り先の住所、氏名を明確にお書き下さい。また、連絡のために電子メールアドレスをご記入下さい。郵便振替口座：「00180-2-539055」名義：「日本教育工学会」

(2) クレジットカードでご送金下さい。

学会ホームページの会員専用ページの左側にある「入金確認」のボタンをクリックして下さい。パスワードが分からない場合はoffice-s@jset.gr.jpにご連絡下さい。

研究会の開催



研究会  
2008

テーマ 教育システム・教材開発のためのICT活用／一般

- 日 時：2008年12月20日（土）
- 会 場：いわき明星大学（薬学部棟）  
（〒970-8551 いわき市中央台飯野5-5-1）
- 担 当：渡邊景子(keiko@iwakimu.ac.jp) Tel: 0246-29-7024

プログラム

発表時間：発表1件につき25分（発表20分程度，質疑5分程度）

会場： A会場（薬学部棟 16-201講義室） B会場（薬学部棟 16-202講義室）  
C会場（薬学部棟 16-204講義室） D会場（薬学部棟 16-205講義室）

9:45- 9:55 開会挨拶・諸連絡

9:55-12:00 午前の部

- A1) 教材としての電子書籍に関する一考察 菅谷克行・長滝美都子（茨城大学）
- A2) 情報分野における学習教材および支援ツールの適用事例に関する一考察 田村慶信・永田武（広島工業大学）
- A3) ポータブルデバイスによる自学用学習教材の提示が学習者の理解に与える影響 荻原康幸・和田智仁（鹿屋体育大学）
- A4) K-zoneにおける音声付加コンテンツの構成に関する研究 永田奈央美・岡本敏雄（電気通信大学）
- A5) 黒板電子化学習記録分析システムSuperclass 柏木肇（電気通信大学）

- B1) 黒板とプレゼンテーションソフトによる授業とノートテイキングに関する調査研究 柳沢昌義・福田沙織（東洋英和女学院大学）
- B2) 身体活動の促進を目的としたプログラムの有効性と評価 岡崎勘造（兵庫教育大学），岡野慎二・羽賀慎一郎（岡山大学），  
関明彦（川崎医科大学），鈴木久雄・高橋香代（岡山大学）
- B3) 三次元仮想空間を利用した大学院修士課程教育コースの紹介の試み 山下大和（九州大学），古殿知之（九州大学／富士通），  
坂本憲昭（九州大学／日本アイ・ビー・エム），福田晃（九州大学）
- B4) 柔道の技を学ぶための学習システムの初期検討 藤野良孝・清水康敬（メディア教育開発センター）

- C1) 異校園連携教育に関する調査研究 一幼保小連携・小中連携・一貫の取組についてー 小柳和喜雄（奈良教育大学）
- C2) 協同制作による国際交流プロジェクトの実践支援ワークシートの開発 稲垣忠（東北学院大学），清水和久（石川県教育センター），塩飽隆子（ジャパンアートマイル）
- C3) 教授ツールとして活用するポर्टフォリオの効果の検討 松崎邦守（柏市立高柳中学校）
- C4) 組織的・継続的な学校ホームページ運用のための体制構築 町田智雄（横浜市立千秀小学校），豊福晋平（国際大学）
- C5) 学校広報にかかるシャドウ・コストの分析・算定 豊福晋平（国際大学）

- D1) 閉じられた大学授業から持続可能な学習コミュニティへ 向後千春・富永敦子（早稲田大学）
- D2) 日本のティーチング・アシスタントの意識と実態 玉村福太郎・向後千春（早稲田大学）
- D3) システムエンジニアを対象とした遠隔日本語学習コースウェアの開発 高橋亜紀子（宮城教育大学），才田いづみ（東北大学），  
小河原義朗（北海道大学），井口寧（北陸先端科学技術大学院大学）
- D4) 外国語不安と学習方略 西谷まり（一橋大学），松田稔樹（東京工業大学）

12:00-13:00 昼休み

13:00-14:15 午後の部第一部

- A6) 教材としてのteiten2000 の活用 渡部昌邦（放送大学大学院），渡邊景子（いわき明星大学），  
篠田伸夫（福島大学），永野和男（聖心女子大学）

- A7) 草原ビオトープライブカメラの試作 渡邊景子・岩田恵理 (いわき明星大学)
- A8) 教科書に利用されるイラストと学習者の印象に関する調査 周村諭里・遠藤梓・柳沢昌義 (東洋英和女学院大学)
- 
- B5) デジタル家電を活用したアノテーションによる授業支援システムの設計 葉田善章・篠原正典 (メディア教育開発センター)
- B6) 教育支援を目的とするプロキシ型Web アノテーションシステムの提案 大門明生・渡辺博芳 (帝京大学)
- B7) 協調形3Dグラフィックス教育支援システムの構築 高山文雄・大表良一 (いわき明星大学)
- 
- C6) 小学校の学習單元における学校放送番組やICTの活用に関する調査 高橋純 (富山大学), 木原俊行 (大阪教育大学), 中山実 (東京工業大学), 武田一則 (日本放送協会), 桑山裕明 (NHKエデュケーショナル), 宇治橋祐之 (日本放送協会), 佐藤知条 (日本放送教育協会)
- C7) 初任者教員のICT活用状況と研修プログラムの検討 山本朋弘 (熊本県立教育センター), 堀田龍也・清水康敬 (メディア教育開発センター)
- C8) ICT活用初心者教員のためのリーフレットの開発 渡邊光浩 (三股町立勝岡小学校), 皆川寛 (登米市立北方小学校), 堀田龍也 (メディア教育開発センター), 高橋純 (富山大学)
- 
- D5) 電子地図とGPSを組み合わせた社会科校外活動支援システムの開発 野村泰朗 (埼玉大学), 菅田浩子 (嵐山町立志賀小学校), 中野篤 (NTTレゾナント)
- D6) 教職科目「教育工学」の授業改善とその効果 松田稔樹 (東京工業大学)
- D7) eラーニング授業におけるレビューシートの利用が授業評価に及ぼす効果 伊豆原久美子・向後千春 (早稲田大学)

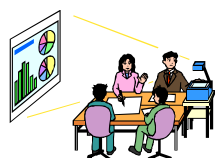
#### 14:30-15:45 午後の部第二部

- A9) マンガによる入門書をWiki的に作成できるWebサイトの提案  
ーアスキーアートを用いたプロトタイプシステムの開発ー 竹内俊彦 (茨城大学), 加藤尚吾 (早稲田大学), 加藤由樹 (東京福祉大学), 涌井智寛 (茨城大学)
- A10) 福島高専におけるICTを活用したeラーニング2.0への取り組み  
ー福島高専SNSを基盤としたコミュニケーションシステムの導入ー 布施雅彦・三浦靖一郎・鈴木三男・根本信行 (福島工業高等専門学校)
- A11) 情報を活用する能力を評価するための汎用試験システム (e-testing) の開発と試行 永野和男 (聖心女子大学), 奥村英樹 (四国大学), 伊藤剛和 (奈良教育大学), 小田典央 (スズキ教育ソフト)
- 
- B8) 小学校段階における体系的・系統的情報モラル教育  
ー3種の知識に基づく情報モラル指導法との一貫性を考慮してー 玉田和恵 (江戸川大学), 松田稔樹 (東京工業大学)
- B9) 児童生徒・保護者・教員を対象とした児童生徒のケータイ所持と使用に対する意識に関する調査 杉本圭優 (富山短期大学), 堀田龍也 (メディア教育開発センター), 石原一彦 (岐阜聖徳学園大学), 那須寛・和田朋子・藤原理香・末吉恵美 (NTTドコモ)
- B10) 高等学校商業科における情報モラル指導カリキュラム開発上の留意点 上野敏浩 (富山県総合教育センター)
- 
- C9) ICT活用教育の実態調査における経年変化に関する検討 波多野和彦・鈴木一史 (メディア教育開発センター), 高比良美詠子 (中部大学), 清水康敬 (メディア教育開発センター)
- C10) 小学校情報テキストを広域採択した地域での利用状況 中川斉史 (三好教育ネットワークセンター), 堀田龍也 (メディア教育開発センター)
- C11) 福島県における教科「情報」の実施状況調査 ー3年間の調査結果よりー 柴田和聖 (福島県立いわき総合高等学校), 高崎潤平・中尾剛・渡邊景子 (いわき明星大学)
- 
- D8) C#による関数グラフィックスシミュレータの開発研究 ー2D,3D及び3DBOXー 柏木肇 (電気通信大学)
- D9) 米国の教師教育改革から何を学ぶべきか ー実践研究と教員の職能開発を支えるべき本学会への期待ー 松田稔樹 (東京工業大学)
- D10) コンテスト参加の教育的効果について ーETロボコンの場合ー 大表良一・高山文雄 (いわき明星大学)



- 参加費用：参加費は無料ですが、研究会報告集の年間予約購読代金を支払済みの本学会会員以外の方は、報告集代として1,000円を当日受付にてお支払い下さい。
- 交通案内：【いわき駅より】 - 詳細は、<http://www.iwakimu.ac.jp/access/> をご覧下さい。 -  
バス：6番のりば（いわき駅前マクドナルド前）より 約20分  
「中央台北中」下車 徒歩10分、「明星大正門」下車 徒歩1分  
（※6番のりばのバスでも大学に行かない路線もあります。また、「中央台北中」は通っても「明星大正門」を通らないバスもあります。乗車の際は、かならずご確認ください。）  
タクシー：約15分  
車でお越しの際は「来客・教職員駐車場」をご利用下さい。
- お知らせ：いわき駅近くに宿泊される場合、「明星宿泊パック」をご利用いただけます。詳しくは、<http://www.iwakimu.ac.jp/access/stay.html> をご覧下さい。

## 研究会の発表募集



### テーマ ICTの教育活用と授業設計／一般

- 日時：2009年 3月 7日（土）
- 会場：椋山女学園大学
- 開催担当：亀井美穂子（椋山女学園大学）
- 申込締切：2009年1月7日（水）
- 原稿提出：2009年2月7日（土）

●募集内容：情報技術や情報化社会の進展、学習指導要領の改訂等、学校を取り巻く環境が大きく変わる中で、引き続き、ICT活用等を含めた教育方法の工夫や改善が求められています。本研究会では、さまざまな教科・領域においてICTを効果的に活用するための授業設計、授業実践、教員研修等に取り組んでいらっしゃる方々から幅広く発表を募り、議論と情報交換を行いたいと考えております。また、上記のテーマにはこだわらない教育工学一般における発表も幅広く募集しております。

- 申込方法：研究会Webページよりお申し込み下さい。  
<http://www.jset.gr.jp/study-group/>
- 申込期限：2009年1月7日（水）  
締切後1週間以内に、申込時に登録されたアドレスに発表の採択結果と執筆要項を電子メールにて送付いたします。
- 原稿提出期限：2009年2月7日（土）  
原稿の提出はPDF形式で、研究会Web ページの「発表申込フォーム」より、発表申込時に発行された「受付キー」を使用してご登録下さい。尚、期限を過ぎた場合はキャンセルしていただく場合があります。

## 今後の研究会の開催予定

開催日	募集テーマ（予定を含む）	開催場所
2009年 5月 16日	ICTを活用したFD／一般	徳島大学
2009年 7月 4日	教科教育学と教育工学の交差点／一般	宮崎大学

- 発表申込み締切は概ね開催日の2ヶ月前となります。
- 研究会に関するご意見・ご希望、研究会テーマ・企画などありましたらお気軽に研究会幹事までお寄せ下さい。  
E-mail: [study-group-core@jset.gr.jp](mailto:study-group-core@jset.gr.jp)

## 年間予約購読のお勧め



●年間購読：研究会報告集の年間予約購読価格は郵送料込みで3,500円です（当日売りは割高になります）。年間5冊、合計500ページ前後で、各研究会平均20件程度（平成18年度実績）の研究発表が掲載されます。詳しくは、学会本部事務局までお問い合わせ下さい。

【学会本部事務局】〒141-0031 東京都品川区西五反田1-13-7マルキビル  
TEL/FAX：03-5740-9505 E-mail: [office@jset.gr.jp](mailto:office@jset.gr.jp)

## 2008年度 冬の合宿研究会のご案内（最終報） テーマ：高等教育現場における教育技術を問う

「FD」の言葉もすっかり定着し、高等教育現場でさかんに授業やカリキュラムの改善が試みられるようになりました。何をやるか？どのようにするか？という段階も過ぎ、日々の実質的な成果の積み重ねが求められています。多様な学生の現状、変化する教育ニーズの中でも、核となるのは教員の教育技術であり、その向上を助けるためのさまざまな理論、道具を教育工学は提供してきました。冬の合宿では、あらためてFDに対して教育工学の視点からどのようなアプローチが可能なのか、研究者としての立場と高等教育に携わる教員の立場の両面から、その可能性を探ります。

- 日程：2009年2月21日(土)～22日(日) 1泊2日
- 場所：山鹿温泉 旅館細川（熊本県山鹿市大字宗方150：0968-43-2231）  
<http://www.yamagaonsen.com>
- 定員：30名（学会ホームページから受け付けます。定員になり次第締切ります。）
- 対象：高等教育の授業改善に関心のある研究者・学生
- 参加費（資料代・1泊3食付きの宿泊代を含む）：13,000円

### ■プログラム（予定）

- ・21日
  - 13:00- あいさつ
  - 13:30- 基調講演「高等教育現場における教育技術を問う（講演者未定）」
  - 15:00- ワークショップの説明(コーディネータ：村川雅弘・鳴門教育大学)  
カリキュラムデザイン、ICT利用、FD、学習評価、eラーニングなどをテーマにサブグループに分かれたワークショップを開催します。参加者には、サブグループのテーマに関する実践事例などを持ち寄って討議してもらう予定です。詳細は、別途お知らせします。
- ・22日
  - 09:00- パネル：ワークショップの成果を共有する  
総括協議（コーディネータ：鈴木克明・熊本大学）
  - 12:00 昼食後解散

詳細及び参加申し込みは学会ホームページをご覧ください。

お問い合わせ先：冬の合宿担当 鈴木克明（熊本大学） [ksuzuki@kumamoto-u.ac.jp](mailto:ksuzuki@kumamoto-u.ac.jp)

## 2008年度 産学協同セミナー開催のご案内（第一報） パネルディスカッション「職業的専門性としての教育工学」 ～教育工学を学ぶ・社会におくりだす・一緒に働く～

- 日時：2009年3月6日(金) 13:30～17:00
- 会場：内田洋行 東京ショールーム  
(<http://www.uchida.co.jp/company/showroom/canvas.html>)
- アクセス：東京メトロ 日比谷線「八丁堀駅」下車、「A4」出口より徒歩4分  
東京メトロ 日比谷線・東西線「茅場町駅」下車、「1番」出口より徒歩5分  
JR京葉線「八丁堀駅」下車、「B1」出口より徒歩5分

今年度の産学協同セミナーでは、「人材育成」を取り上げます。大学で教育工学を学ぶことのゴールは、研究者になることだけではありません。学習支援に関する理論や手法、教育システム開発・デザインのための実用的スキルを生かして、教育関連企業において活躍することも、教育工学を学ぶことの重要なゴールです。このような人材を育成して教育関連企業におくりだすことは大学の社会貢献の一側面であり、また、大学から受け入れた学生を育て、実践的教育工学の研究・開発を担う人材として育成していくことは、一企業の利益にとどまらず、教育工学という研究分野の進展にとっても大きな貢献となります。「教育工学で働く人材」の育成は、まさに、産学が協同で取り組むべき課題と考えられます。

そこで、今回のシンポジウムは、大学関係者、企業関係者、そして、大学から企業に入って活躍中の若手の3者を話題提供者にお招きし、それぞれの立場から、大学における人材育成の理念と現状、企業における人材育成の現状と大学に求める点、教育工学を学ぶことのキャリアメイクとの関連等、について語っていただきます。指定討論、全体討論をとおして、人材育成という視点からみた教育工学の発展を、大学・企業の双方からどのように支えていけるかについて、考えていきたいと思っております。

教育工学を専攻する学生諸氏、大学教員、企業において企画・開発に従事されている方等、幅広い立場の方の参加をお待ちしております。

詳細については、学会ホームページに掲載します。

# 日本教育工学会論文誌 論文募集

## 特集号「協調学習とネットワーク・コミュニティ」のご案内（最終報）

近年、進展著しい協調学習研究ですが、学習コミュニティをどう把握・デザインするかという研究はまだ緒についたばかりです。今後は、協調学習とそれが展開するコミュニティの構築を支援する研究を促進する必要があります。そこで本特集号では、コミュニティをデザインし、支援するという観点を含む学習環境研究を集約し、協調学習やその支援テクノロジーの「社会的なデザイン方針」についての総括を目指します。特集号の趣旨に適した理論的なレビュー論文や考察論文、また現在展開されている教育実践による実証的研究論文の投稿を期待しています。

### 1. 対象分野

- (1) 多様な学習者ネットワークを創造するための協調学習の利用
- (2) ブログやSNSといったICTを利用した学習環境のデザイン、およびその実践
- (3) 学習者共同体のデザインと、その学習効果の実証的な検討
- (4) エスノグラフィなどの手法を用いた学習者ネットワークの分析
- (5) 学習活動のネットワーク構造の数量的な分析（潜在構造分析、ネットワーク分析など）
- (6) 実社会での学習・熟達化の過程に関する調査研究、モデルの提案
- (7) 教室や道具などの学習環境のデザインが学習者共同体に与える影響の分析

### 2. 募集論文の種類

通常の論文誌と同様に、「論文」「資料」「寄書」を募集します。投稿規程ならびに査読は、通常の論文誌の場合と同じです。なお、「ショートレター」として既に掲載されている内容を発展させ、「論文」として投稿することも可能です。ただし、単に分量を増やして詳細に説明しただけでは発展させたことになりませんので、ご注意下さい。

### 3. 論文投稿締め切り日（2009年11月発行予定）

投稿原稿を2月9日までに電子投稿をお願いします。ただし、2月16日までは、論文を改訂することができます。従来の特集号の場合とは異なり、締め切りの延長は行わない方針です。

投稿原稿提出締め切り（電子投稿）：2009年2月 9日（月）

最終原稿提出締め切り（電子投稿）：2009年2月16日（月）

### 4. 論文投稿の仕方

原稿は、「原稿執筆の手引」(<http://www.jset.gr.jp/thesis/index.html>)に従って執筆し、学会ホームページの会員専用Webサイトから電子投稿して下さい。郵送による投稿は受け付けませんことになりました。

### 5. 問い合わせ先

電子メール：[tokushu2009@jset.gr.jp](mailto:tokushu2009@jset.gr.jp)

Tel/Fax：03-5740-9505 日本教育工学会事務局

### 6. 特集号編集委員会

委員長：大島 純（静岡大学）

副委員長：加藤 浩（メディア教育開発センター）

幹事：大島律子（静岡大学）

・舟生日出男（広島大学）

委員：稲垣成哲（神戸大学）

・柏原昭博（電気通信大学）

・久保田賢一（関西大学）

向後千春（早稲田大学）

・澤本和子（日本女子大学）

・鈴木克明（熊本大学）

鈴木栄幸（茨城大学）

・鈴木真理子（滋賀大学）

・竹中真希子（大分大学）

中原 淳（東京大学）

・永田智子（兵庫教育大学）

・西森年寿（東京大学）

平嶋 宗（広島大学）

・堀田龍也（メディア教育開発センター）

宮田 仁（滋賀大学）

・室田真男（東京工業大学）

・望月俊男（専修大学）

山内祐平（東京大学）

・山口悦司（宮崎大学）

# ショートレター増刊号論文募集のご案内（第一報）

日本教育工学会論文誌 vol. 33, Suppl. の発行

論文受付締切：2009年4月1日（水） 編集委員会事務局必着

日本教育工学会論文誌vol. 33, Suppl. は、年1回発行されるショートレターの増刊号です。投稿規程および原稿執筆の手引きを参照の上、奮ってご投稿下さい。ショートレターの採録条件は、Vol. 27より以下のようにになりましたのでご注意ください。（詳細は、JET117号参照）

1. ショートレターは、刷り上がり4ページ厳守です。（4ページを超えるものは採録しない）
2. ショートレターでは、筆頭著者（ファースト・オーサー）は本学会会員であることが条件です。あるいは、筆頭著者が投稿時に入会手続きおよび会費納入等を行うことが必要です。なお、各会員は本ショートレターを年1偏に限り投稿できます。
3. 2009年12月に発刊の予定です。

ショートレターの内容については、例えば、以下のような内容が考えられます。

- ・全国大会や研究会で発表した内容をまとめたもの
- ・教育実践をベースにした実践と知見をまとめたもの
- ・教育システム開発など
- ・教育工学研究としての速報的な内容
- ・卒業論文や修士論文等としてまとめた内容、など

なお、ショートレターに掲載された内容を、研究的に発展させまとめて、論文採録の条件を満たすと思われる内容は、学会論文誌に投稿することができます。ページ数が限られていることから、タイトル、著者、内容については十分厳選の上、ご執筆下さい。特に、ショートレターの趣旨から、多人数の連名著者はさけて下さい。研究全体がプロジェクトチームによる共同研究であっても、実際にショートレターの限られた内容に直接携わり、執筆した研究者にしてくださいようお願い致します。

ショートレターの査読日程予定(2009年度)：

- 4月中 担当及び査読者の指名
- 5月 編集委員会で査読進捗状況の確認
- 7月 編集委員会で採録、返戻の第1回決定
- 9月 編集委員会で採録、返戻の第2回決定
- 10月 最終原稿の提出
- 11月 著者校正
- 12月 増刊号発行予定

論文投稿の仕方：

原稿は、「原稿執筆の手引」(<http://www.jset.gr.jp/thesis/index.html>) に従って執筆し、学会ホームページの会員専用Webサイトから電子投稿して下さい。今回より郵送による投稿は受け付けておりませんのでご留意下さい。

問い合わせ先：

電子メール：short2009@jset.gr.jp

Tel/Fax：03-5740-9505 日本教育工学会事務局

## 日本教育工学会主催「大学教員のためのFD研修会」のご案内

学会では、3月末に大学教員のためのFD研修会(ワークショップ形式)を実施します。講義・演習は1日ですが、課題や継続の討論と組み合わせっており、修了者には学会から「認定書」を発行することになっています。

テーマ：多人数教育の授業設計と管理

－他人数の講義で学生が主体的に参加できる自律的学習の実現に向けて－

日 時：2009年3月29日(日) 10:00～17:30

場 所：聖心女子大学

定 員：40名

講 師：西之園晴夫・望月紫帆(NPO法人学習開発研究所)、永野和男(聖心女子大学)、  
宮田 仁(滋賀大学)

現在、大学が当面している受講生数100名以上の多人数教育はこれからの大学経営にとってきわめて

重要な機能を果たすこととなりますが、その合理的な解決には①現在の講義方式による多人数教育についてICTを活用して改善する。②少人数のチーム学習あるいはグループ学習をICTで管理する多人数教育を開発する。③個人学習を基本とした完全なe-Learningを実現して結果として多人数教育を実現する。などの方法があります。今回のワークショップでは、このうちの②のチーム学習で多人数教育を実現する方法を紹介します。詳細及び参加申し込みは学会ホームページをご覧ください。

## 研究奨励賞候補者をご推薦下さい

第24回全国大会（上越教育大学）の研究発表者の中から、研究奨励賞の候補者を下記の要領でご推薦下さい。

発表をお聞きになっていない場合でも、論文集をご参考をお願い申し上げます。

### 選考の基準

1. 選考対象者は、本学会の会員であって、受賞時に40歳を越えていないこと。ただし、本学会入会時から5年を経過していない場合は考慮する。
2. 選考時点から遡って最後の年次大会での正式の研究発表登壇者であること。
3. 既に研究奨励賞を受賞している者でないこと。
4. 対象者の過去の研究業績を尊重すること。

注：研究奨励賞（1985年10月31日 理事会申し合わせ）

「研究奨励賞は、教育工学および関連領域に関する学問の奨励のため、有為と認められる新進の研究者に贈呈する。この奨励賞を受ける者は、本学会会員であり且つ研究大会において講演を行った中から、優秀な論文を発表した者から選定する。」

なお、理事・評議員・大会役員・座長担当者の方は率先してご推薦下さいますようお願い申し上げます。

★締め切りは、12月31日（水）とさせていただきます。

----- キリトリ線 -----

## 第24回 研究奨励賞候補者推薦用紙

候補者氏名	講演番号	推薦者

日本教育工学会

Tel/Fax: 03-5740-9505

E-mail: office@jset.gr.jp

# 第12期第11回理事会議事録

日時：平成20年9月20日(土)14:30～16:30

場所：キャンパス・イノベーションセンター 2階 多目的室4

出席：赤堀侃司会長，永野和男副会長，野嶋栄一郎副会長，矢野米雄副会長，赤倉貴子，伊藤紘二，大久保昇，澤本和子，清水康敬，中山 実，東原義訓，美馬のゆり，宮田 仁，室田真男，山内祐平

1. 第12期10回理事会議事録を資料1のとおり承認した。

2. 会員の移動について承認した。

(1) 新入会員： 111名(正会員:40名，学生会員:59名，准会員:12名)

(2) 退会会員： 9名(正会員: 6名，学生会員: 3名)

(3) 種別変更： 6名(正会員へ2名，学生会員へ1名，准会員へ3名)

3. 各種委員会報告について

(1) 編集委員会

清水編集長から資料に基づいて，和文誌，英文誌の編集進捗状況，特集号およびショートレター増刊号の査読進捗状況について報告があった。

また，投稿規程の著作権について，本学会論文誌の出典情報を明記することを追記して改訂すること，論文誌の投稿テンプレートについて，TeX版も用意する予定であることが報告された。

(2) 研究会委員会

会長から資料に基づいて委員会活動状況について説明があった。

(3) 企画委員会

美馬委員長から資料に基づいて夏の合宿研究会の実施報告，および冬の合宿研究会の日程と企画案について説明があり，これを承認した。

(4) 大会企画委員会

東原副委員長から，ニューズレターに基づいて説明があった。参加者を増やすために，大会への参加を呼びかけることが話し合われた。次大会は，東京大学で2009年9月19～21日に開催することを承認した。

(5) 顕彰委員会

研究奨励賞候補者について，大会で各セッションの座長に依頼することを確認した。

(6) 選挙管理委員会

澤本委員長から役員選挙に関する規程について説明があり，これを承認した。

選挙に関する規程に基づいて，第13期役員選挙の日程案，次期役員候補者の推薦に関する手順の説明があり，これを承認した。

(7) 国際交流委員会

会長より大会に2名の外国人を招待することが説明された。

(8) 広報委員会

赤倉委員長から資料に基づいてJSETニューズレター162号の台割案が示され，ページ数の構成について検討した。宮田副委員長から学会Webサイトの更新について提案があり，整備に関して相談した。

4. その他

(1) FD特別委員会について

永野副会長から，学会としてFDを実施する期限付委員会体制としてFD特別委員会について提案があり，これを承認した。今年度中にFD研修会を開催する予定が報告された。

(2) 「日本教育工学会第24回全国大会」文部科学省名義の使用許可が得られたことが報告された。

(3) 後援名義使用について承認した。

・第59回放送教育研究会全国大会 第12回視聴覚教育総合全国大会 合同大会（全国放送教育研究会連盟）

・ワークプレイスラーニング2008 企業教育部門の「未来」を考える（東京大学・大学総合教育研究センター）

- (4) 協賛名義使用について承認した。  
・教育システム情報学会第33回全国大会（教育システム情報学会）  
・シンポジウム「モバイル09」（特定非営利活動法人モバイル学会）  
(5) 本学会への広報を確認した。

以上

## 第12期第12回理事・評議員会(合同)議事録

日時：平成20年10月12日(日)12:30～13:45

場所：上越教育大学

出席：

理事 赤堀侃司，赤倉貴子，伊藤紘二，植野真臣，大久保昇，大谷 尚，小柳和喜雄，木原俊行，黒上晴夫，向後千春，澤本和子，三宮真智子，清水康敬，鈴木克明，中山 実，永野和男，野嶋栄一郎，東原義訓，堀田龍也，宮田 仁，室田真男，矢野米雄，山内祐平  
評議員 石塚丈晴，稲垣 忠，浦野 弘，加藤 浩，久保田賢一，黒田 卓，園屋高志，永岡慶三，南部昌敏，野中陽一，長谷川元洋，前迫孝憲，村川雅弘，柳沢昌義，吉崎静夫  
監事 山西潤一

議事に先立ち，大会実行委員長の南部評議員より挨拶があった。

1. 第12期第11回理事会議事録承認について  
資料のとおり承認した。  
・国際交流として中国側のからの来日予定者がビザの関係で出席できなくなったことが報告された。
2. 各種委員会の報告
  - (1) 選挙管理委員会  
澤本委員長から，予備投票について大会開催中の投票について依頼があった。
  - (2) 顕彰委員会  
三宮委員長から，研究奨励賞の投票依頼があった。また，大会全体会で論文賞の概要説明があることが報告された。
3. その他
  - (1) 機関別認証評価委員会専門委員候補者の推薦について  
大学評価・学位授与機構から標記の依頼があり，会長が回答した旨，報告があった。
  - (2) 協賛名義使用を承諾した。  
WCCE 2009(教育システム情報学会)
  - (3) 本学会への広報を確認した。
  - (4) 評議員から学会運営全般に関する意見が出された。

最後に来年度大会開催大学の山内理事から挨拶があった。

- (5) 今後の理事会

第12期第13回理事会 2008年11月29日(土)14:40～16:20

以上

お問い合わせ先 (Eメールアドレス)

- ◆ 論文投稿に関するお問い合わせ…………… 編集委員会 (editor@jset.gr.jp)
- ◆ 研究会の開催についてのお問い合わせ…………… 研究会事務局 (study-group-core@jset.gr.jp)
- ◆ 全国大会の開催についてのお問い合わせ…………… 大会企画委員会 (taikai2008@jset.gr.jp)
- ◆ ニュースレター編集に関するお問い合わせ…………… 広報委員会 (kouhou@jset.gr.jp)
- ◆ その他のお問い合わせ…………… 学会事務局 (office@jset.gr.jp)

新入会員(2008年7月8日～2008年9月16日)

■正会員 40名

小林 博典(宮崎大学)  
富田 英司(愛媛大学)  
衣笠 高広(宮崎大学)  
佐藤 ゆかり(上越教育大学)  
椿 美智子(電気通信大学)  
孕石 敏貴(日進市立梨の木小学校)  
林 壯一  
東本 崇仁(早稲田大学)  
百田 止水  
(熊本大学教育学部附属小学校)  
小山 嘉紀  
(両備ホールディングス株式会社)  
鈴木 聡(青山学院大学)  
安田 光孝(北海道情報大学)  
梶野 明信(日野市教育委員会)  
富田 隆一郎  
(両備ホールディングス株式会社)  
鈴木 基(日野市教育委員会)  
寺谷 愉利子(関西看護医療大学)  
近藤 照敏(園田学園女子大学)  
植村 朋弘(多摩美術大学)  
廣嶋 道子(福岡大学)  
中西 紹一  
(楠プラス・サーキュレーション・ジャパン)  
野崎 真也  
田上 隆徳(阿南工業高等専門学校)  
石井 輝義  
藤吉 弘亘(中部大学)  
奥田 雅信(大手前大学)  
笹田 能美(イーココロ協議会)  
倉舘 健一(慶應義塾大学)  
濱野 英巳(慶應義塾大学)  
栗本 英和(名古屋大学)  
横田 亮宏  
木村 哲夫(新潟青陵大学)  
古山 みゆき(共栄学園短期大学)  
赤崎 竜次  
(沖縄県立美来工科高等学校)  
松田 善臣  
寄能 雅文(龍谷大学)  
李 禧承(筑波大学)

秋葉 裕子(学校法人 後藤学園)  
宮崎 英一(香川大学)  
坂井 聡(香川大学)  
小清水 貴子(長崎大学)

■学生会員 59名

高島 志穂(東京理科大学大学院)  
太田 健介(静岡大学大学院)  
榊原 涼太(静岡大学)  
佐藤 万知(オックスフォード大学)  
中村 おりお(電気通信大学大学院)  
村上 徹(関西大学大学院)  
鈴木 淳也(上越教育大学大学院)  
三角 徹(徳島大学大学院)  
廣山 知史(東京学芸大学大学院)  
川村 理絵(上越教育大学大学院)  
下門 洋文(筑波大学大学院)  
太田 恵子(玉川大学教職大学院)  
西久保 健太(早稲田大学)  
小川 和裕(上越教育大学大学院)  
渡邊 拓真(広島国際大学)  
アブドサラム ダウティ  
(東京電機大学)  
木村 一統(東京電機大学)  
加藤 雅人(東京電機大学)  
岡本 絵莉(東京大学大学院)  
砂田 裕太(拓殖大学)  
神保 智広(拓殖大学)  
青野 文美(玉川大学)  
富田 聡(拓殖大学大学院)  
江口 千穂(玉川大学教職大学院)  
小林 雅之(広島大学)  
佐竹 謙一(広島国際大学)  
伊藤 綾音(上越教育大学大学院)  
北原 加保里(長崎大学大学院)  
野口 聡(関西大学大学院)  
成瀬 浩健(関西大学)  
岩崎 友則(長岡技術科学大学)  
泰山 裕(関西大学大学院)  
白井 宏和(東京学芸大学大学院)  
安西 弥生(国際基督教大学)  
石垣 憲(首都大学東京)

春原 将寿(東京学芸大学大学院)  
岡崎 勘造(兵庫教育大学大学院)  
藤原 瞬(上越教育大学大学院)  
Zaorski Spence(大阪大学)  
牧村 真帆(東京大学大学院)  
小幡 佳菜絵(早稲田大学)  
青木 望(東京学芸大学)  
宮地 和芳(関西大学大学院)  
永井 暁人(電気通信大学大学院)  
橘田 孝一(山梨大学)  
大藪 達彦(大谷大学)  
山田 寛邦(東京大学大学院)  
西尾 美也(東京藝術大学大学院)  
脇本 健弘(東京大学大学院)  
石田 翼(兵庫教育大学)  
関 徳斌(関西大学大学院)  
莫日根 達来(東京学芸大学)  
篠ヶ谷 圭太(東京大学大学院)  
栗原 里菜(早稲田大学大学院)  
永澤 悟(東京学芸大学大学院)  
福山 佑樹(東京大学大学院)  
野澤 紘子(東京大学大学院)  
池尻 良平(東京大学大学院)  
八木 秀文(熊本大学大学院)

■准会員 12名

田中 哲也(上越市立雄志中学校)  
畠山 久(株式会社アドウェイズ)  
Yang Jie Chi  
(National Central University)  
Hwang Gwo Jen  
(National University of Tainan)  
岡野 紗季  
Kuo Chin Hwa(Tamkang University)  
駒木 亮  
(ATR Learning Technology株式会社)  
岡田 大士  
渡辺 綾  
斉藤 与志朗  
太田 一彦  
竹内 一裕(深川市立一巳小学校)

広報委員会

編集長：清水康敬， 広報委員長：赤倉貴子， 広報副委員長：宮田 仁，  
委員：矢野米雄， 伊藤剛和， 香山瑞恵， 神月紀輔， 皆川 武， 三輪吉和  
E-mail: kouhou@jset.gr.jp

日本教育工学会ニューズレター No. 162

2008年12月10日 発行人 赤堀 侃司  
発行所 日本教育工学会事務局  
〒141-0031 東京都品川区西五反田1-13-7 マルキビル  
TEL/FAX: 03-5740-9505 E-mail: office@jset.gr.jp  
http://www.jset.gr.jp/ 郵便振替 00180-2-539055